

「 時空を超えて五七五 」

広重浮世絵の世界をたどる

【1】

／恋猫の喧嘩も花よ 朝まだき／

／春朝明 締めてほどよし鞋の緒／

江戸の昔の旅立ちは、朝早かったのです。夜が明けるか明けないかのうちに出発した。時刻でいえば寅の刻...午前四時頃ですから、しらしら明けの曙の空です。

ぎゃおぎゃおわめいていたのは恋にくるった猫。そのわめき合いも、火事と喧嘩は江戸の花、といわれた町らしい情景です。

出だしの二句は、《東海道五十三次》日本橋・朝の景 からのそスナップです。

このシリーズは、広重の、あの宿場絵を見ながら読んでいただくと良いのですがね.....

／春暁の旅のそびらに飛ぶ切り火／

...今の時代は、旅の無事・安全を願って切り火を打つなんて皆無でしょう。おかみさんが思いをこめて亭主の肩に、切り火を打った一瞬をスナップしたのです。

／早立ちや残月眠き春の寅／

／春なれや毛槍文笥の七つ発ち／

...国にもどる参勤交代の列も、やはり早立ちでした。「日のあるうちになるべく遠くまで行きたいな」、そんな想いで旅の計画は立てたのでした。

ですから、《...五十三次》の 品川 につく頃、ちょうど日の出になります。昨夜、別れを惜しみ過ぎて、眠気の抜けきらない人いたことでしょう...

／春暁の眼も明け六つの供揃い／

／春下向犬もつきゆく供揃い／

...武士たちも町人も、東京湾いや江戸の海を左に、右に御殿山の桜を遠目にみながら見ながら街道をゆく...そこが 品川 の宿。

泉岳寺にたちよって香を手向けた旅人もいたでしょうね、きっと。御殿山は花のさかりでした。

／花に酔い花の枝折るおちゃっぴい／

...むろん、あの頃にもおきゃんな娘はいましたよ。スナップには、打ってつkena被写体でした。

姉さんなのかな、流行の髪型に結い上げた艶な婦人も...

／花は五分勝山髪の髻に散る／

今は御殿山から東京湾方向を眺めてもビルばかり。でもあの頃は、浪に揺れる番船たちのむこうに奥行きのある大きな風景がひろがっていました.....

えっなに？と、粗暴な大声に振り返ると、無粋な奴がね。あの頃の侍は、よく、浅黄裏のをお召しになってましてね...

／浅黄裏 濁み声で酔う花のした／

／安房上総富士もありけり花の山／

／警女無明葉桜近き御殿山／

この大きな風景に、杖をつき三味線をかかえた女達もみとれている、と思ったのですが...

...彼女たちの心眼は、もっと雄大な風景を描いていたのでしょうか。

品川には江戸四宿の一つで、男には楽しい宿ありました。で、居残り三次 とか 芝浜の財布 なんていう面白い噺...ご存じでしょう。

／居続けて春の蚊をき蒲団部屋／